
七夜の奇跡

糸雨 冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夜の奇跡

【Nコード】

N1691BA

【作者名】

糸雨 冷

【あらすじ】

黒い・・・禁忌と呼ばれる色を持つイツクは、大輪の薔薇のような男天女と出会い、恋に堕ちる・・・。
何も知らないイツクと、少しでも不器用な男天女の物語。

*サイト公開済み

1： 月のない日（前書き）

イツク：こよいのるんり女の子、禁忌と呼ばれる黒髪黒目、ストリートチルドレン
今宵野竜里：男の子、薄紫の髪と濃紺の瞳、天姫

1： 月のない日

オヤは、早くに亡くなった。

ハハオヤしかいなかったけど、それでも彼女はアタシを大切にしてくれたし愛してくれたし？

彼女の前では迫害され続けるアタシも守られるべき子供でいられた。

まるでオモチヤのように簡単に彼女が事切れたあの日、アタシは泣くことをやめた。

だって泣いたって誰も慰めてくれないし、頭をなでてくれる優しい手も存在しない。

そうでしょう？

カミサマだなんて信じてなかった。

救いだなんてどこにもなかった。

世界はひどく汚れていたし、誰も助けってくれなかった。

だからあなたに出逢ったとき、アタシ、すごく驚いたの。

だってあなたは、天使のように綺麗で、悪魔のように冷たかったから。

それはまるで、汚れたアタシすらも救ってくれる、綺麗な存在のようだったから。

彼女が死んで何年たったんだろう。

わからないけれど七歳の誕生日は彼女が祝ってくれた。

そしてアタシは十三歳の誕生日を迎えた。

だからたぶん、彼女が死んで六年くらい。

そのあいだにアタシはストリートチルドレンというものの仲間入りをして、ロクデモナイ、アタシの容姿をおそれない仲間たちと一緒に暮らしてる。

彼女の声も、彼女のぬくもりも忘れた。

それでも彼女がくれたモノだけはなくさずにアタシはまだ生きてる。イツクっていう、名前も。

死を招く死神の色といわれるこの真っ黒な髪と瞳も。

そしてこの躰ですら彼女がくれたもの。

アタシは、彼女の子供だから。

彼女がくれたこの躰と、彼女がくれたアタシの名前。それだけがアタシの宝物。

月のない夜だった。

しんしんと降り積もる雪が冷たくて、アタシのこと、カラスバツて呼ぶ仲間たちと一緒に、仲間の誰かがどこから盗んできた毛布を一緒にきて小さく丸まって眠らないと寝れないようなそんな夜。

今でも鮮明に覚えているわ。

アタシやアタシの仲間たちが立ち入ることも許されないその場所に、貴方は一人立ってたの。

きつと死ぬまで忘れやしない。

アタシは今でも、あの出逢いは運命だったと信じてる。

長い薄紫の髪が、雪の舞う風に踊っていて、端正な顔立ちはやや神経質そうなの…不機嫌そうな表情を彩り、濃紺の瞳からはまるで作り物のような冷たそうな印象を受ける。

大きな十字架が掲げられた教会の前で、貴方はその建物を憎々しげに見上げる。

「じろじろ見るな。」

冷たいその物言いに、アタシはハツとする。

貴方は慌てるアタシに冷たい一瞥をくれ、長く綺麗なその髪を翻し歩き出す。

濃い夜の闇と長い薄紫の髪、そして白い教会のコントラストがひどく綺麗でどうしようもなくなくて。

アタシはとっさに貴方の黒いコートをつかんだの。

本当に、無意識だったのよ？

貴方はその濃紺の瞳を一瞬大きく見開き、すぐにまた不機嫌そうな表情に戻る。

すぐ元の表情に戻ってしまったことが残念で、それでいて違った顔が見れたことがうれしくて、マーブル模様のようなわけのわからない気持ちになった。

「十二。俺に何か用でもあるの？」

青年とも少年とも言えるくらいの容姿にしては不釣り合いな色香のある声が響く。

彼の視線がアタシから動かないことにアタシは思わず硬直する。

無機質なガラス玉のような濃紺の瞳が私を見据える。

アタシの手より大きな手がアタシの手を包みこむ。

「手、離して。動けないでしょう。」

コートを掴んでいたアタシの手をつかみ、そこから離す。

コートから離されたアタシの手は、依然、貴方の手の中で。

少年にも青年にも見える容姿からは想像できないほどにしっかりと、大きな手。

だけどその指先は、性別に反した長く綺麗に整えられた爪が彩る。

…さすがにマニキュアは塗ってなかったけれど。

「アタ…シのコト、怖く…ないの？」

アタシの問いかけに彼のもとと不機嫌そうだった端正な顔立ちがさらに不機嫌そうに歪む。

「何で俺が、子供に怯えなきゃいけないの。馬鹿にしないで。俺を誰だと思ってるんだ。」

怯える子供が泣き出してしまいそうな鋭い視線にアタシは思わず息をのむ。

「誰…って、そんなの知らないけど、でもっアタシは、死神の色を持つ子供で、死を招くって言われてる色で、それでっ。」

慌ててそんなことを口走るアタシの顔に、彼はその端正な顔を近づける。

ふわりと香る、薔薇の香り。

「だから、なんだっていうの？
死は人に対して、平等に訪れる。この天姫あまきが、そんなもの恐れるはずがないだろう？」

高慢で傲慢なその物言いが似合うほどに、彼は美しい人だった。薄紫の髪は風にはためき、濃紺の瞳は遥か高みからアタシを見下ろす。

それはまるで、大輪の薔薇のように美しく。

「ア…マキって、なに…？」

彼は、アマキさんは大きなため息をつく。

やっぱりそのまま、「アマキ」というのは彼の名前だったのだろうか？

「まさか、わが天^{あまき}姫殿を知らない人間がこの地域にいるなんてね。」

アマキデン

アタシの知らない言葉。「アマキ」っていうのも、それに関係するもののかな？

首を傾げるアタシを呆れた目で見降ろしていた彼は、ずっと掴まれたままだったアタシの手をつかんだまま歩きだす。

身長之差からか、歩幅が違い、半ば引きずられるようにアタシは歩くはめになる。

「ねっねえ、どこに行くのっ？」

彼としては明確な目的地を持って移動しているのだろう。ただどそれは彼の意志であるからに、言ってくれない限り、先ほどであったばかりのアタシが理解することはできない。

彼はアタシの方をちらと見て、また前を向いて歩きだす。

「だから、どこに……」

「天姫殿。」

先ほど出てきたその言葉に、アタシはぽかんとする。アマキデン、それはどうやら場所の名前だったみたいだ。

「口で説明するより、見せた方が早いでしょう。」

そう言っただけで彼は、アタシの手を掴んだまま、すたすたと歩いて行く。ただどやっぱり小走りで引きずられるように歩くのって辛いもので…。

「ねえっねえ！アマキさんっ」

「……なに。」

アタシの声に、彼はわずかにスピードを落として、振り返る。長い薄紫の髪が、その動作に合わせて揺れて、ひどく綺麗。

「もうちょっとゆっくり歩いてよ、アタシとあなたじゃ足の長さが違うんだから。」

アタシのその言葉の意味を確かめるかのように彼はゆっくり瞬きを繰り返したのち、一言感想を零した。

「短足。」

とても綺麗で、とても失礼な人。
それが竜里りゅうりの、第一印象。

2：闇に身を置くもの

彼に腕を引かれてやってきたそこは、ひどく立派な建物で。

煌びやかなそこには、美しい女の人たちがいっぱいいて、それでもやっぱり、この“アマキ”という彼ほどに美しい人はいないように見えた。

アタシのこの黒い色合いのせいか、歩けば歩くほどに周りの人による騒音はひどくなる。

その中で時折聞こえる、“アマキサマ”という言葉。

どうやら彼は、あの高慢な物言いのとおり、ここでは偉い地位にあるらしい。

「天姫っ」

人ごみの中から、よく通る凜とした声が聞こえた。

多くの女の人の間をかきわけるようにして現れたのは、鮮やかな緋色の髪と濃紺の瞳をもつ、

アマキと同じくらいに綺麗な人。

まあ…男の人だったんだけど。

「ただいま、タエ。」

「タエじゃない。白妙しろたえと呼べって何度も言っているだろう。」

呆れたようにそう言って、タエと呼ばれたその人はため息をつく。濃紺の瞳はとても、アマキと似た色合いをしている。

「タエがだめなら、みー君って呼ぼうか？母さんが呼ぶみたいに。」
幾分も年上の彼をからかうかのようにアマキは笑う。
妖艶な微笑みというのが相応しいようなその笑みに、アタシは目を奪われる。

「……タエでいい。それより天姫、仕事中抜けだすだなんて何事だ。」

「別にいいじゃない。今日は特にやるべき仕事もなかったんだし。天姫殿にいることだって立派な仕事だ、ってタエは言うけど、ただ座ってニコニコしてるだけって結構暇なんだよ？」

「お前がいつ、ニコニコと客に愛想振りまいたって言うんだ……。」
脱力、呆れ、そんな風にアマキはタエを振り回す。
疲れた風のタエを見て、アマキはにっこり笑う。

「でも安心していいよ。今度からは抜け出さないから。そのためになんかわざわざ捨てきたの。」

そう言っただけでアマキは、ポンとアタシの肩に手を置く。
そこで初めてタエの視線がアタシに向き、彼は大きく目を見開く。

「えっと……竜里？俺には……その子が犬猫であるようには見えないんだが。」

「うん、人間の女の子だけどそれがどうかした？」

爽やかに言い切るアマキにタエは脱力している。

…というか、アタシはアマキデンが何かを教えてもらうためにここに来たんじゃなかったっけ？

「だってタエが、どうせ面倒見切れないんだから犬猫は拾ってくるなっていったんだよ？」

だから面倒なんて見る必要のないものを拾ってきたの。

犬猫を拾ってくるよりは、ずっといいでしょう？」

ただただ綺麗に、アマキは笑う。

外にいた時はひどく不機嫌そうな顔をしていたのに、ここに入ったとたん、にっこり作ったような笑みを浮かべるアマキにアタシは目を白黒とさせるしかできない。

「とりあえずその子、人目に付かないところにも連れてってやれ。俺たちは気にしないけれど、そうじゃない人だっているんだからな。」

タエのその言葉に、アタシは自分の長い髪を慌てて手で隠す。

だけど背中の中ごろまである長い髪は、アタシの小さな手で隠しきれるはずもなく。

そんなとき、アタシの頭に柔らかいものがかぶせられる。

よく見てみると、それはあの時アタシがつかんだ、アマキのコートで。

「それ、持っててよ。」

一言そう言って、アマキは歩き出す。

アタシはアマキのコートを頭からかぶったまま、慌てて彼の後を追う。

歩いて歩いても、そこにいるのは綺麗で煌びやかな着物を着た、綺麗な女の人ばかり。

時折すれ違ふ、綺麗な女の人と仲睦まじげに歩くお金持ちそうな男の人。

アタシの生きてた世界とは、全く別の、綺麗な世界。

「ねえっアマキさん、ここって何するところ？」

そう聞いたアタシを、アマキは一瞥する。

アマキの濃紺の瞳は冷めているように見えてとても深みがあって何を考えてるのかアタシにはわからなかった。

「オンナを、抱くところ。」

はつきりと言われたその言葉に、アタシは何を言われたのかとつさに理解できず、目を白黒とさせる。

その言葉が、綺麗すぎるこの場所とアマキにあまりにも似つかわしくないものだったからか、ぽかんとするアタシにアマキは皮肉げに笑い、もう一度繰り返し返す。

「天姫殿。」

天女のように美しい女を神殿のように美しい建物で、金次第でいくらでも抱ける、そんな場所。」

そして彼は一番奥にある部屋の前で止まり、襖を開ける。現れたのは豪華で品のいい調度品で飾られた豪華な部屋。

「そして俺が、十八代目天姫殿当主。今の、天姫。」

長い薄紫の髪を翻し、天姫は部屋の中に入る。

傲慢で美しい、天女の館の主。

部屋の襖をあけたまま、いきなり服を脱ぎだした彼にアタシは驚く。

「ちょ、なんで服脱ぐのっ!」

文句を言うアタシを変なものでも見るかのように彼は見る。

女の子として普通の反応であるはずなのだが、彼の周りの女の子はこんな反応はしないとでもいうのだろうか?

「さっきのタエとの会話、聞いてたでしょう?」

俺はまだ仕事があるの。だから仕事着に着替えるだけ。」

そう言っただけで彼は着替えを再開する。

アタシはとも見えてられなくて、頭からかぶっていたコートを顔までかぶる。

信じられない、もう少し気を配ってくれてもいいと思うなどと思いつつながら。

「何、コートかぶってるの?」

そんな言葉と共にコートを奪い取られ、

そこにいたのは煌びやかな女物の着物に身を包んだ天姫の姿。

廊下にたくさんいた女の人たちと同じようにその裾は引きずるような長さで。

彼女たちと違うところは、彼女たちは前で帯を結んでいたことに対して、天姫は後ろで帯を結んでいるということか。

先ほどまでは背中を流れていた長い薄紫の髪は高い位置で一つに結われている。

「なんで、女物の着物なの……?」

アタシの問いに小さく彼が首をかしげ、長い薄紫の髪を結びあげた白い簪が小さく揺れる。

「天姫殿の天姫は、天女を抱ける館の、唯一手の届かない天女だからね。

“天女”である限り、その中身が男であっても女の姿をしているのは当たり前だろ。」

女にはとても見えそうにない長身でありながらも、中性的な顔立ちの天姫は、その衣装がひどく似合っていた。

「ああ、それと…天姫じゃなくっていいよ。

アマキは仕事上の名前だから。あんたは竜里って呼べばいい。」

「ろん…り。アタシは、イツク！イツクって、言うの。」

大きな声でそう言ったアタシの頭をポンとたたき、竜里はゆっくり笑みを形作る。

「あと一刻ほどしたら仕事終わりだから。

そしたら戻ってくるから、ちゃんとここにいてね。ここにある本、適当に読んでいいから。」

そう言って竜里は部屋を出ていく。こうしてアタシは、竜里のモノになった。

あれから、幾らか経っただろうか…。

アタシは天姫殿での生活に慣れ、毎日優雅にのんびりと暮している。基本的には竜里の部屋にこもり、本を読みふける毎日。

今まで本なんて読んだことなかったから文字を読むことはできなかつたけど、空いている時間を見つけて竜里や白妙…雅灯さんやその奥さんの雪葉さん、竜里のお母さんの樋摘さんが教えてくれたので、アタシはすぐに文字を読むことができるようになった。

本は楽しい。

アタシの知らない、いろんなことを教えてくれる。

本の他にも琴や三味線など、アタシの知らないいろんなものがあり、竜里は少しずつアタシにそれらを教えてくれた。

天姫殿にいる多くの人の中で、先ほどあげた数人以外の人はアタシの容姿を恐れた。

でもその中にたった一人だけ、アタシの容姿を気にせず仲良くしてくれる人がいた。

天姫殿一の遊女をあらわすという太夫の称号をもつ遊女、香梓ちゃん。

「イツクちゃん。」

鈴のなるような可愛らしい声をした香梓ちゃんは、竜里と同じ十八歳。

十三歳だったアタシは竜里に拾われて一年、十四歳になった。

竜里の部屋の外から顔を出した香梓ちゃんの姿を見て、アタシは顔を綻ばせる。

少しだけ癖のある長い空色の髪と橙色の瞳の可愛い可愛い香梓ちゃん

ん。

「こんばんは、香梓ちゃん。」

アタシがそう言つと、香梓ちゃんはこんばんはと返し、部屋の中に入ってくる。

そしていつもとは違う部屋の中をきよるきよると見回す。

「天姫は…いないのね。」

アタシ一人だけだった部屋の中、部屋主の姿を彼女はいつも探す。

「竜里は、樋摘さんに呼ばれたからぶつくさ言いながらも行ったよ。もうしばらくしたら、帰ってくると思う。」

アタシの言葉に、香梓ちゃんはそっかと言って笑う。

香梓ちゃんはきつと、竜里のことが好きなんだろう。

「香梓、また来てるの?」

声をした方を向くと、男物の着物に身を包んだ竜里が、襖の横で眠そうに欠伸をして立っている。

雅灯さんが樋摘さんが呼んでるって言いに来た時、竜里はまだ寝てる時間だったから、アタシが無理やり起して向かわせた。

いつもより起きる時間より早かったからまだ眠いのだろう。

「天姫、おかえりなさい。」

「竜里、おかえり。」

「…ただいま。」

竜里はそう言っ、アタシの膝に乗っていた本をどけて、そこを占拠する。

竜里はスキンシップが好きなのか、人がいても普通にアタシの膝を枕として使う。

例えそれが、竜里のことを好きな香梓ちゃんの前であっても。

「半刻したら起こして。」

そう言い残して、竜里はすぐに眠りにつく。

いつも思うことだが、竜里はとても寝つきがいい。

「天姫がそうしていたら、イツクちゃんは天姫が起きるまで動けないじゃない。ねえ?」

そう言っ、苦笑する香梓ちゃんはどことなく切なそう、

アタシは手持無沙汰な手で竜里の髪をなでた。

香梓は最初から、他と違う目で俺を見てた。

物心つく頃から先代天姫であつた父は亡くなっていて、代役としてタエ…雅灯が天姫についていたけれど、それでも彼は直系の人間ではなかつたから、十二になる年に俺が天姫になることは決まっていた。

幼いころからその立場に在るべき人間として注目されていて、俺は人に注目されることに慣れていたからなのか、香梓の視線が他とは違うことにすぐ気付いた。

熱を孕んだ、別の視線。

だけど俺の興味はそんな香梓にさえも注がれることなく、あの日教会の前で出逢つた一人の子供に注がれることとなつた。

何にも染まることのない漆黒の色を持つ、何かにひどく怯えながらも、誰よりも俺をまっすぐ見た少女。

今まで俺に向けられるものは畏怖やら尊敬やら同情やら香梓が向けるようなものばかりで、イツクのようにただ映すと言っただけの視線を向けてきたのはイツクが初めてだった。

俺が初めて興味を示した存在。

3：知られたくない秘密

天姫殿で一番眺めのいい部屋は、天姫の部屋である。

表と呼ばれる料亭のある建物と裏と呼ばれる遊女屋のある建物、その間にある大きな桜の木を一番綺麗な角度で見られるのが天姫の部屋だ。

聞いた話によるとあの桜の木は竜里のお父さんである桜歩さくほさんが産まれた日に先々代の天姫、

つまりは竜里のおじいさんが植えたものらしい。

体が弱く、二十歳まで生きられないと言われていた、けどそんな一人息子ができるだけ長く生きるように、強く大きな桜の木のようになるようにと、“桜歩”と名付けてあの桜の木を埋めたらしい。

「竜里の名前は、どういう意味があるの？」

アタシがそう尋ねると、アタシの長い黒髪を弄っていた竜里はその動きを止める。

色素の薄い竜里の髪が僅かに揺れる。

竜里の髪は、綺麗。

もちろん竜里自体も綺麗だけど、男の子に対して綺麗っていうのは変なのかな？

藤の花に似た、淡い紫色。

「さあ？知らない。

父さんがつけたらしいけど、聞く前に、死んでたし。」

竜里はいつも、なんとも思っていない風に桜歩さんのことを話す。

二歳になるころに死んでしまったと言っていたから何も覚えてないのだからうけど、それでも知らない人のことを話すように話す。

「イツクの名前は？」

意識が別方向に飛んでいたアタシの意識は、竜里によってこちらに連れ戻される。

だからと言ってその方法に髪を引っ張るのはやめてほしい。

「なんだったかな……。いつくしむ？っていう字だってお母さんは言ってた。」

「慈しむ？」

竜里は確かめるように聞き返す。

何か変なこと言ったかな？

「別に、変な言葉じゃないじゃない。」

「それはそうだけど、女の子の名前の漢字にはおかしいでしょ。」

そう言って竜里は掴んでいたアタシの黒髪から指を離し、綺麗な動作で立ち上がる。

夜も更けてきて、そろそろ竜里は仕事の時間。

「さて、俺はそろそろ仕事行くけど、あんまり部屋から出ないようにな。」

「毎日同じこと言われなくっても、わかってるよ。」

頭を撫でてくれる竜里の手が心地よくなって、でもなんでかそれが気
恥ずかしくって、アタシは身をよじらせる。

竜里は毎日同じことを言う。

アタシの黒髪と黒い瞳は人目にさらされるにはいささかまずい。

仕事に出る竜里を見送ると、部屋の中にはアタシ一人になる。

もちろんこの時間になると香梓ちゃんもお仕事だから部屋にやって
くることはない。

天姫殿当主である竜里の部屋は広くって、たくさんの方がいる天姫
殿だけど、天姫の部屋がある最上階は白妙である雅灯さんや樋摘さ
んの部屋しかなくて、もちろん彼らも仕事だからこの時間ほど
く静か。

人のいない広い部屋は寂しくて、アタシは遠い昔のことを思い出す。
竜里に拾われてもうすぐ二年。

アタシは一五歳、竜里は一九歳になった。

初めて逢ったとき竜里は一七歳で、二年前の竜里よりもアタシはま
だ幼い。

そんなアタシにとっての、遠い昔。

アタシのお母さんは、凜ちゃんって言う名前だった。
アタシとは対照的なほとんど色のない銀の髪をしていて、甘い蜂蜜
みたいな色の目をしてた。

最初からお父さんはいなくって、なんでアタシにはお父さんがいな
いの？って聞いたたら、凜ちゃんは困ったように笑った。

そうやって聞いたことあるけども、アタシはお父さんが欲しかった
わけじゃなかった。

だって、凜ちゃんはいつもアタシと一緒にいてくれたもの。

そりゃあお仕事の時は無理だったけど、それでもそれ以外の時間は
ずっとアタシと一緒にいてくれた。

凜ちゃんは、お花屋さんで働いていた。

そのお花屋さんはおじさんとおばさんが二人で経営していて、凜ち
ゃんは従業員ってやつだった。

おばさんはアタシに優しくしてくれたけど、おじさんはアタシに近
づこうとしなかった。

小さなおうちで凜ちゃんと二人暮らし。

もちろん今いる竜里の部屋よりはるかに狭くって、それでも凜ちゃ

んが仕事に出かけると不自然に広い気がして仕方なかった。
近所の人たちはやっぱり変な眼でアタシを見てたから、凜ちゃんも竜里と同じようにあまり家から出ないように言ってた。
凜ちゃんは何も言わなかったけど、おじさんの視線や近所の人目でアタシは自分の容姿がおかしいことに気づいていた。
何がどうおかしいのかわからなかったけど、五歳になるころには自分以外の黒髪黒目の人を見たことなかったことから、この色合いがおかしいってことを知った。

お休みの日には、凜ちゃんは教会に連れて行ってくれた。
凜ちゃんはクリスチャンで、でもアタシの髪と瞳は教会に行くには不都合なものだったので、髪を隠して行ってたんだ。教会はきらきらとしてて、すごく綺麗で、凜ちゃんはその風景にひどく溶け込んでいた。

お買い物に行くにもやっぱりアタシはお留守番で、少しそれが悲しかったけど、凜ちゃんはちゃんと帰ってきてくれたから別にかまわなかった。
今はもうないけどあの頃お気に入りだったクマのぬいぐるみを抱えて、凜ちゃんが帰ってくるのを玄関で待っていたのを今でもよく覚えてる。

そんなことを思い出してアタシの意識は、いつもこの時間にはないものによって引き戻された。

悲しいほどに静かな空間に響いた、物音。

「死…神……？」

知らない人の、アタシに対する、蔑称。
それだけならまだしも、知らない人じゃ、なかったの。

「凜の…娘？」

教会に来ていたのはもちろん凜ちゃんとアタシだけじゃなくって、その中にはもちろん男の人もいて、凜ちゃんは綺麗だったから、よく人に話しかけられてた。

アタシと凜ちゃんは色合いだけは全く違ってたけど、顔立ちは凜ちゃんにそっくりで、特に近頃はさらに凜ちゃんに似てきたと自分でも感じるほどだった。

凜ちゃんを知ってる人が見ればすぐわかる、アタシと凜ちゃんが他人じゃないということ。

「お前つ…死神だったのかっ」

アタシに詰め寄るその男の人は確かにどこかで見た覚えがあって、教会だとは思っただけどアタシはあの時小さかったからはっきりとは思いだせなかった。

凜ちゃんは、病死とかじゃなかった。アタシを庇って、死んじゃったの。

凜ちゃんのお葬式はお花屋さんのおじさんとおばさんが開いてくれて、アタシはその隅っこで髪を隠して小さくなって泣いていた。

アタシのせいで死んだ凜ちゃんを、好きだった人。

「死神がいたから、凜はっ」

あまりに驚いたからか、頭がついて行かない。

竜里は、天姫の部屋には関係者しか来ないって言ったのに。

男の人は、アタシに詰め寄る。

アタシは反射的に、彼から離れようと後ろに下がる。

竜里の部屋を出て、部屋の外の廊下へ。

天姫殿の廊下は普通の家の廊下よりずっと広いんだろうけど、それでもやっぱり距離に限りはあって。

アタシは欄干のそばへ、あっという間に追いつめられる。

竜里の部屋の前の廊下は、反対側に別の部屋があるわけでもなく、そこは表と裏を繋ぐ中庭：あの桜の木のある庭に面している。

つまりは、行き止まり。

よくわからないことを叫んでいた男の人が少しずつアタシに近づき、アタシは怯えることしかできない。

彼の言ってる言葉の意味が理解できなかったのは、彼が錯乱して本当におかしなことを言っていたからか、それともアタシが理解しただけでなかったのか。

「ナニを、してるの？」

聞こえてきたのは、目の前にいる男の人とは別の、男の声。

凜と澄んだ、静かな声。

視線を向けると、いつもと同じように豪華な女物の着物に身を包んだ、竜里の姿。

長い薄紫の髪は繊細な装飾を施された白い簪で結びあげられて、竜

里の動きに合わせて小さく揺れる。

「何をしてる、って聞いてるんだけど？」

そう言っつて竜里は、アタシたちのほうに近づき、男の人の腕をつかみ上げる。

「あま…き…。」

「そう、天姫。」

そしてここは天姫の私室の前であり、お客様が立ち入ることは禁じられてる場所だよ。

その上それに近づくななんてどういっつもり？それは天姫のものだよ？」

絶対零度の微笑みを浮かべ、竜里はその男を突き飛ばす。

美しく冷たい微笑みを浮かべる竜里は、アタシでさえも少し怖い。

「タエ、それつまみ出して。」

竜里のその言葉に、竜里と一緒に来ていたのだろう雅灯さんが、男を拘束して連れて行く。

アタシはと言つと、気が抜けたのだろう、腰が抜けてしまい、その場にしゃがみこむ。

「イツク、大丈夫？」

言葉と共にアタシへ延ばされた竜里の手に、アタシの体は大げさなほどに震える。

竜里が怖いわけじゃない。

ただ、先ほどまで向けられていたあの男の人の言葉が怖くって、少しだけ心が疑心暗鬼になってただけ。

そんなアタシに竜里は目を丸くして、首をかしげる。

「俺のこと、怖い？」

「そんなことっ」

そんなこと、あるわけない。

アタシのその言葉は紡がれることなく、アタシは竜里の腕の中。

「恐がらなくてもいいよ。大丈夫だから。」

優しい竜里の声が心地よくて、アタシは思わず泣いてしまう。

すると竜里は困ってるとも呆れてるとも取れるように溜息をついて、アタシが泣きやむまで抱きしめていてくれた。

「そう言えば竜里、なんでいたの？」

泣きやんだアタシがまず疑問に思ったのは、今は仕事であるはずの竜里がなんでここにいるのかということだった。

「別に俺の部屋なんだから、いてもおかしくないでしょう？」

「それはそうなんだけど、今はお仕事の時間じゃないの？」

アタシの言葉に、竜里は袂から何かを取り出す。

そうやって取り出されたのは、小さなクマのぬいぐるみ。

「どっしたの？これ。」

手のひらサイズのそれを、竜里はアタシの手に乗せる。

首に赤いリボンを巻いた、茶色いクマのぬいぐるみ。

「お客さんから貰ったから、イックにあげようかと思って。」

それは昔大切にしていた、凜ちゃんがくれたクマのぬいぐるみによく似ていた。

4：身を苛む不安

竜里に拾われて三年。

アタシは一六歳に、竜里は二十歳になった。

天姫殿は相変わらずたくさん女の人で溢れていて、竜里も相変わらず忙しい。

三年も一緒にいるとあれだけ掴みどころがないと思っていた竜里のこともある程度わかってくる。

竜里は、アタシの髪をいじるのが好き。

紐や簪を使って結って遊ぶ時もある。ただ触っているだけの時もある。

竜里の手は白くって指が長くって、でも男の子だからか、アタシの手よりずっと大きくてごっごっしている。

でも天姫だから爪は長くっていつも綺麗に整えられている。

竜里は、歌うのが好き。

この頃は当たり前のようにアタシの膝を枕にして、そんな竜里を放置して本を読むアタシのそばで小さな声で歌っている。

男の人にしては少し高い竜里の澄んだ声がメロディーを奏でるのを聞くのは、すごく耳に心地よい。

「ねえ竜里、それって何の歌だったっけ？」

かすかな声で歌う竜里の歌。

どこかで聞いたことのあるそれを、アタシははっきりと思い出せな

い。

「何の歌って…讃美歌でしょう。」

サンビカ。

どこかで聞いたことのある響きに、アタシは首をかしげる。
サンビカ…サンビカ…なんだったけな？

「教会で歌う、神を讃える歌。」

そう言われ、アタシはどこで聞いたのかをはっきりと思い出す。
昔教会で、凧ちゃんが歌っていたんだ。

「そういえば竜里って、クリスチャンなの？」

休みの日には教会に通っていた凧ちゃん。

彼女は確か、クリスチャンだった。

首にロザリオもかけていたしね。

だけどアタシが思うに、竜里はクリスチャンであるようには思えない。
い。

確かに初めて会った時も教会の前にいたし、よく讃美歌も歌っているけれど、何となく神様を信じてるようには思えないんだ。

「イツクは、クリスチャン？」

竜里は寝そべっていた体を起こす。

膝の上に乗っていた頭がどいて確かに楽になったはずなのに、それを寂しく思うのは何でだろう。

「アタシは…この髪だからさ、髪を隠さないと教会に入ることまで
きなかったから、ちゃんと教えを受けたことないの。だからクリス
チャンじゃないよ。」

少しだけ凜ちゃんが教えてくれたこともあったけど、

その時アタシは幼かったからまったく言っていないほど理解するこ
とはできなかった。

「ふうん。」

一言そう言って、竜里は立ち上がる。

彼の動きに合わせて薄紫の髪が揺れ、キラキラと煌めく。

「これ、読んでみなよ。わからないところあったら教えてあげるから。」

そう言って手渡されたのは、一冊の聖書で。

重みのある黒い表紙には読み込まれた跡があり、何となくそれに、
ぬくもりを感じた。

「ああ、そういうえ俺はクリスチャンじゃないよ。」

神様は信じてないけれど、教会とか讚美歌とか、あと聖書とかが好
きなだけ。」

そう言って竜里は再びアタシの膝を占拠して、昼寝を始めた。

近頃、竜里の周りは、少し騒がしい。

と、どうか雅灯さんがよく竜里のところに来てくれる。

いつもその時、アタシは席をはずすように言われて、雅灯さんの奥さんの雪葉さんと一緒にいる。

話の内容は聞いたことないけど、大体の予想はつく。

先代天姫である竜里のお父さんの桜歩さんは、一八歳で結婚したそう
うだ。

桜歩さんと竜里の間に代行という形で天姫をしていた雅灯さんは一
六歳で婚約し、一七歳で結婚したそうだ。

竜里は現在二十歳。おそらくこの頃雅灯さんがよくやってくるのは、
竜里の結婚のこと。

そのことを考えると、アタシの胸は不自然に痛む。
なぜかは、わからない。
知らないふりを、もう少しだけ。

「イツク、どうかしたのか？」

ぼうつとしていたアタシを不思議に思っただのか、雪葉さんが心配そうに顔を覗き込んでくる。

そんな雪葉さんになんでもないよと微笑み返し、アタシは襖の外に見える桜の木に視線を向ける。

もう少しだけ、今の幸せを味わっていたい。

竜里と二人、優しい時間を過ごしていたい。

たとえその時間が、あと少ししか残っていないとしても。

漠然とした、でも確かに何かが変わっていくというアタシの不安は、
思いもよらない形で裏切られることになる。

ねえ竜里、知ってた？

初めて逢った時、貴方のことを天使や悪魔のように思ったけど、そんな漠然とした綺麗なものでしかなかった貴方が、アタシにとって、いつの間にかかけがえのないものになってたの。

貴方は一度しか言ってくれなかったけど、アタシは何度だって繰り返すよ。

アタシは竜里を、愛してるから。

5：ずっと明けないように感じて

一七歳になったアタシは、あの日の竜里に追いつけているのだろうか？

近頃よくそんなことを考えるが、追いつけているようにはとても思わない。

初めて出逢った頃から竜里はアタシにとって年上の男の子で、それはもちろん今も変わらないから。

今年も竜里と一緒に、正月を迎えた。

アタシは一七歳に、竜里は二十一歳になった。

やっぱり冬は寒くって、でも過去にストリートチルドレンだったアタシにとって、この天姫殿での冬はとても快適だった。

それにここでは、竜里と一緒にいてくれる。

1年ほど前から結婚しろ、身を固めろとせつつかれている竜里だが、彼は相変わらず独身で、相変わらずアタシと一緒にいてくれる。

「イツク、雪降ってる。」

いつものように膝を竜里の枕代わりに提供していたアタシは、竜里の言葉に本から顔を上げる。

今読んでいるのは、竜里からもらったあの聖書。

聖書はすごく分厚くって、それでいて難しくって、なかなか理解できなかつたから竜里にいつぱい聞いてやっとなかかならなくなった。

わかるようになってくるとそれがとても面白くって、アタシは何度も繰り返し読んだ。

襖の先、中庭のほうに目を向けてみたら、はらはらと舞い落ちる白い欠片。
緩やかに舞い落ちるその欠片はひどく幻想的で、ただでさえ現実味のない美しさを誇る天姫殿をさらに美しいものへと染め上げる。

「竜里つ雪、雪だよっ」

「だからさっき、俺がそう言ったんじゃない。」

はしゃぐアタシの頭を竜里は落ち着けとでも言いたげにポンポンと叩く。

雪を見ると、わくわくする。

もう子供じゃないんだから落ち着けて竜里は呆れるけど、それでも止められない魅力が雪にはある。

天姫殿の表である料亭部分の黒い屋根を、雪がまだらに白く染める。赤い遊女屋部分の屋根にも白い雪がうつすらと積もり、幻想的。漆塗りの欄干の上に溜まった少量の雪を、竜里の白くて長い指が払い落とす。

風で舞う雪が竜里の薄紫色の髪に色を増やす。

「竜里つ雪だるま作りたい！」

アタシが両手を広げてそう提案すると、竜里は呆れたように溜息をつく。

呆れたように、ではなく本当に呆れているんだろっけ。

「まあ、この時間だったらいいか。」

呆れた声とため息と共に、アタシは竜里から部屋の外に出る許可をもらった。

「竜里っ誰っ！」

「ちっきからずっとな降ってるけどしょっ。」

イツクはずつと降ってる雪に飽きもせず、ウサギみたいに飛び跳ねている。

髪を隠すために被っている衣がとれなきやいいんだけど。

僅かながらの気にしない人以外に忌み嫌われるイツクの漆黒の髪は、やっぱりここ天姫殿でもあまり良くなって。

天姫である俺と一緒にいる女の子だなんて、髪を隠していてもすぐに見世の者にはイツクだってばれるだろうけども、それでもその視線にイツクが気付きにくくなるなら俺はいくらでも彼女の髪を隠そうと思った。

舞い散る雪と同じくらいに美しい、何にも染まらない漆黒の色。

「イツク、あんまり飛び跳ねると転ぶよ。」

そう言った矢先に彼女は思い切り足を滑らせる。

驚いて慌てて足を踏み出し、俺はぎりぎり彼女のその小さな体を受け止める。

出逢ってから、彼女の背丈は幾分か伸びた。

だけど俺の背丈も幾分か伸びたので、俺からすれば彼女は出逢ったころと変わらず小さい。

俺の腕の中で、彼女はポカンと呆けている。

もう少し落ち着けていつも言ってるのに、人の言うことを聞かないから足を滑らせたりするんだと思いつつも、彼女が無事だったことに俺は安堵の息をもらす。

「ほら、言わんこつちやない。」

俺のそんな言葉にも彼女はどこ吹く風、ニッコリ笑顔を浮かべて俺の腕の中から飛び出していく。

「竜里っありがとうっ」

そう言って走っていく彼女の頭には、被っていた衣はなくて、自分の腕の中を見れば、さりげなく衣が押し付けられていた。

「イツクつかぶっとけてっ！」

そう叫ぶ俺に、イツクはニッコリ笑って手を差し出す。

「竜里と一緒に雪だるま作ってくれるなら、それ被いとく。」

俺がイツクと一緒に雪だるまを作るはめになったのは言うまでもない。

「天姫…あれはなんだ。」

春になればそれは見事な桜の花が咲き誇る天姫殿の中庭にあまりにも似つかわしくない雪だるまが二つ。

「雪だるま以外の何に見えるっていうの？」

白妙である雅灯にそう聞かれ、不機嫌そうに天姫である竜里は答える。

不機嫌そうに見えるその様子も、いつもの不機嫌とは違い、なんだか子供が拗ねているような様子で。

優雅で幻想的な天姫殿にそのどこか微笑ましくも子供っぽい雪だるまはひどく歪で、違和感を感じさせる。

「こないだ雪が降った日に、イツクと作ったの。」

竜里のその言葉に、確かにイツクは雪だるまとか好きそうだと雅灯は一人納得する。

そんな雅灯に向って、竜里は自分の両手を突き出す。

「見て、この手。」

ずっとイツクと素手で雪弄ってたから、手がしもやけになったの。それもイツクは何ともないのに、俺だけこうなったの。」

もう年なのかなどとぼやきながら、竜里は自分の手を見つめる。その様子がひどく子供っぽく見えて、雅灯は思わず笑みをこぼす。

「何がおかしいって言うの。」

確かにイツクよりは年取ってるけど、そんなに衰えるほど年取ってないと思うんだけど。」

「そうじゃなくって、昔はひどく子供らしくないガキだったのに、今はなんだかあの頃よりも子供っぽい気がするなって思ってる。」

雅灯のその言葉に、竜里は首をかしげる。

幼い頃の竜里は、十二になったら天姫になることが決まっていることとや、

片親しかいなかったこともあいなって、ひどく子供らしくない子供だった。

可愛げがない、と言うか…ひどく冷めた子供だったのだ。

淡々として、大人びた物言いをしていた。

ただどこ数年…イツクを拾ってきてからは、なんだかひどく、竜里は楽しそうだ。

「俺…退化してるって、こと?。」

そう呟いてショックを受ける竜里を見て、雅灯はまた笑った。

降り続ける雪を見上げ、窓の外にそっと手を伸ばす。

指先に乗った雪は、あっという間にその熱で溶けてしまう。

仕事が終わわり、部屋に帰る途中、ふと廊下で歩いている立ち止まり、歩いている立ち止まり、雪に…手を伸ばす。

何度目だっただろうか…指先に乗った雪が解けたとき、頭がひどく痛んで思わず近場にあった柱に手をつく。

頭の痛みはいっこうに治まらなくてだんだん平衡感覚が危なくなってきた、倒れるかもしれない、そんなことを意識の端っこで感じた時、俺にとって何よりも鮮明に聞こえる声が、聞こえた。

「竜里？」

長い黒髪が、雪と共に風に揺れる。

大きな黒い瞳が、俺を映す。

「イツク…。」

それだけ呟いて、俺の意識は途絶えた。

いつも仕事が終わって部屋に帰ってくる時間になっても竜里が返ってこなかったから、こっそり部屋を抜け出して、竜里を探しに来た。

もうこの時間になってくると天姫殿であってもみんな寝静まってひどく静か。

しんしんと降りつもる雪は綺麗で、それでいてこの静けさに拍車を

かける。

雪は、音を殺すのだと竜里が言っていたから。

見下ろした天姫殿の中庭には、アタシと竜里が作った雪だるまが二つ並んでいる。

幻想的な天姫殿の中にそんなものがあるのはなんだか不釣り合いで、それでいてなんだか楽しくなる。

静かな天姫殿の廊下を進んでいくと、遠くに人影が見えてきた。

長い薄紫の髪をいつもと同じ繊細な作りの白い簪で結びあげ、豪華な女物の着物に身を包んだ長身の青年。

彼の白く長い指が外へと伸ばされ、雪に触れる。

その様子はひどく幻想的で、アタシは思わず声をかけることも忘れて立ち止まる。

そんな時、竜里がふらつき柱に手をつく。

完璧な美しさを誇っていた空間は竜里によって壊され、アタシは我に返る。

「竜里？」

アタシの声に、竜里はこちらを向く。

竜里の濃紺の瞳はどこか虚ろで、アタシはとたんに心配になる。

「イツク…。」

そう呟いたきり、竜里の体は大きく揺れて、床に倒れた。

「竜里っ竜里っ！」

「で、医者に診てもらえって言うてるのにおまえは何文句を言っているんだ。」

あの日倒れた竜里は、次の日にはけろりとしていて、周囲を驚かせた。

本人はどうせ疲れが溜まっていただけでしょ、などとあっさりしており、周りだけが心配している。

「だってわざわざ面倒じゃない。仕事だってあるんだし。」

心配して言う雅灯さんになんともない風にそんなことを返すが、ちやんとお医者さんに診てもらってほしいと思っているのはもちろん雅灯さんだけじゃない。

何やら聞いた話では、竜里は幼いころからひどい医者嫌い、よっぽどのがない限り行かないらしい。

でも今回は倒れたのだ。

それでも竜里にとってはお医者さんに行く必要のないことなのかな？

「さて、と。そろそろ仕事の時間だし、着替えるとするかな。」

そう言って布団の中に押し込まれていた竜里は立ち上がる。

言うことを聞こうとするそぶりさえ見せない竜里に、雅灯さんはため息をつく。

アタシはというと構わず着替えだす竜里が着替えを始める前に、慌てて別室に避難した。

「それで、イツクを追い出して何を話すんだ？」

イツクがいなくなった部屋の中、そんなことを言うタエに俺はため息をつく。

母さんはタエのことを鈍いと言っけど、俺からすればタエは嫌味なほどに勘がいい。

「昔の可愛かったというみーちゃんが見てみたいなあ。」

「……いったい何の話だ……。」

「近頃母さんが、しきりに『昔のみーちゃんはあるにかわいかったのにつ』って繰り返す。」

そう言う母さんを想像してどっと疲れたのか、タエは頭を抱える。まあ確かにいつまでたっても少女のような母さんの相手をするのって、失礼な話だけどころと疲れるよね。

「まあ母さんのことは置いて、嫌な話だけど、次の天姫を考えた方がいいかもしれない。」

俺のその言葉に、タエは顔を上げる。

男前と称される端正な顔は悲しげに歪められており、なんとなくもつたいないなと感じた。

「お前、やっぱり医者に…。」

「医者に見せても、たぶん無駄だと思う。頭がずっと痛いから、俺はきつと長くないよ。」

未婚で、なおかつ子もない天姫が、おそらく長くない…。

それは天姫殿にとって致命的なことだけど、幸いなことに今の白妙である夕エ… 雅灯は先代の従弟でもあるし、彼には三人の子がおり、なおかつその次男は隔世遺伝により、天姫と同じ薄紫の髪と濃紺の瞳をしている。

雅灯の父は、先々代の天姫の実弟で、その容姿は天姫と酷似していたから。

「結婚しろ。」

俺の息子がいると言ったって、やっぱり天姫を継ぐのは、お前の子供の方がいいんだから。」

死を身近に感じるような病になった、そんな話をしながらも話の内容は天姫殿の跡取りのことで。

やっぱりこういうとき俺たちは狂ってるのかもしれないと、強く感じる。

「結婚はしないよ。」

「お前、この期に及んで何を言ってるんだ。自分に時間がない、そう言ったのは竜里だろう！」

雅灯に怒鳴られ、俺は苦笑する。

脳裏から離れることのない、たった一人の女の子。

「イツクと結婚したいのなら、それでも構わないと前から言っているだろう。」

俺や桜歩兄だつて禿かむろだつた少女を妻に迎えているんだ。

それに比べれば、イツクを妻にしたつて天姫殿に損害は出ないんだ。

「

禿は、天姫殿が金を払つて買った少女である。

その少女たちを買つた代金は、禿が遊女となつて初めて利益を取れる。

つまりは、禿が遊女となる前に妻へと迎えたら、その禿を買つた時に支払つた代金は、

天姫殿の損害となる。

「確かに、イツクを妻にしても天姫殿に損害は出ないね。

でも俺は、イツクとは結婚はしないよ。誰とも、結婚はしない。」

たった一つ、理由があった。
あの何にも染まらない色を持つ彼女が、俺を見た瞬間に、何かが変わるとそう感じたから。

たった一つの、特別になった。
だから俺は、守ろうと思った。
すべてのものから迫害され続ける彼女が、笑って暮らせる世界を守ろうと。

言葉は、紡がない。
それが嘘であれ言葉なら並べることができると、俺は知っているから。
それでも彼女が望むなら、きっと俺は本当の言葉を紡ぐだろう。

イツクを、愛してる。

6：ただ安らかに

竜里が倒れたところから、一年。あれから多くのことが、変わった気がする。

一八歳になったアタシは依然変わりなく、竜里のそばにいたことを許されていて、長い間結婚しろと竜里に言い続けていた雅灯さんは、竜里が倒れたあの頃を境に、結婚のことを全く言わなくなった。

二十二歳になった竜里は相変わらずの性格で、でも床に伏せることが多くなった。誰もがきつと、気づいている。だけど誰もきつと、口に出すことを恐れている。

竜里はきつと、長くない……。

「竜里、林檎貰ったつ。」

籠にいつぱいの林檎を、雪葉さんから貰った。
甘い甘い、真つ赤な果実。

床の中にいた竜里は、部屋に入ってきたアタシを見て体を起こす。
なんだかひどく、眠そう。

「寝てるよこだった？」

「別にいいよ、いつも寝てるようなもんだし。」

寝てばかりであっても竜里の爪は遊女のそれのように綺麗に整えられて
いるし、長い薄紫の髪はさらさらと揺れる。

「林檎、剥いてあげるよ。」

竜里がいる布団の横に座り込み、アタシは小刀で林檎を剥く。
すると皮は剥けて、赤い色の下から白つぱい実が現れる。

「眠い。」

ふとそんなことをいう竜里に、アタシは苦笑する。
いつも寝ているようなもんだと言ったのは自分なのに。

「そんなに眠いなら、寝たらいいのに。」

アタシの言葉に、竜里は視線をこちらに向ける。
髪とは違い、しっかりした色素をもつ、濃紺の瞳。

「眠たいんだけど、寝れないんだよね。」

なんていうか、眠たいというよりも起きてるのが辛いつて感じ。」

そう言った竜里は、アタシを見て少し悲しげに笑う。

白い指がアタシへと伸ばされ、大きな手がアタシの頬を包む。

「イツク、泣きそうな顔してる。」

「だって、竜里…っ。」

頬を撫でていた手が頭へと移動して、アタシの黒い髪を優しく梳く。
竜里の白い指と、アタシの黒い髪が交差する。

「そんな顔しないでよ。まだ時間あるから、そんな顔しないで。」

時間があるって、竜里はいつも言うけど、そう言ってる間に竜里の
体はどんどん弱ってきた。

雅灯さんが竜里に結婚しろって言わなくなったのは、結婚しても子
供が残せるほどの時間が竜里に残ってないからでしょう？

そんな思いだけがアタシの胸に渦巻いて、アタシはひどく複雑な気
持ちになる。

竜里が元気だったころは竜里が結婚してしまうの、あんなに嫌で仕
方がなかったのに、今になれば竜里が結婚できないことが悲しくて

仕方がない。

竜里は嘘つきだ。

敏い竜里は自分が長くないこと、気づいてないはずなのに、アタシの前ではいつもそんなことないよって言う。アタシを、不安にさせないために。

そしてアタシも、嘘つきだ。

そしてアタシは、我儘だ。

竜里に結婚してほしくなかった理由に、ずっと前から気づいてる。それはきつと、竜里に初めて逢ったときから変わらない気持ち。

アタシは自分が死神と呼ばれる存在であるとわかっていながら、竜里と釣り合わない存在であるとわかっていながら、竜里の隣にいたいと思っていたんだ。

誰にも、譲りたくなかった。

他の女に奪われるだなんてまっぴらごめんだった。

竜里が優しいから、その優しさに甘えて、アタシは何も言わなかったの。

アタシは、竜里が好き。

嘘をつくのは、得意なつもりだった。

幼いころから足の先から僅かな髪の毛の先まで残すことなく、この世界に浸かって生きてきたから。

だけどこんなに、ばればれの嘘をつくことになるとは思ってもみなかった。

安っぽい嘘は、嫌いだった。

どうせつくのなら、ばれないように完璧な嘘をつきたかった。

それでも彼女が泣かないためなら、いくらだって安っぽい嘘をつこうと思った。

それが何と呼ばれる感情なのか、ずっと前から気づいている。

だけどそれを言葉にしてしまったら、彼女を守り続けることができないから、その言葉を必死に隠してきた。

だけど近頃、その言葉を紡いでしまいたい気持ちにひどく駆られて

いる。

死期が近くて、俺もだんだんおかしくなってきたのかもしれない。

はらはらと舞い落ちる雪を見ると、彼女と出会った日のことを思い出す。

あの日までは確かに、雪が好きだったわけじゃないのに、あの日の存在でそれは、確かに特別なものへと変わった。

仕事を抜け出して立ち寄った町にあった、小さな教会。

屋根の上には大きな十字架が掲げられていて、それはひどく綺麗で、心奪われて…同じくらいに憎かった。

俺は教会や聖書や讚美歌が好きだけど、それによって祀られているあの神様は、俺が営んでいるような仕事をしている奴を、受け入れやしない。

綺麗な綺麗なそれらのものは、本当に悲しい場所にいる人間を、救ってくれはしない。

好きだけれど、憎いそれを見上げていた俺を、彼女はひどくまっすぐ見つめた。

多くの人が天姫と敬い、多くの人が水商売のものと蔑む俺を、彼女だけがただ見つめた。

教会のせいでいらついていた俺に、鋭い言葉を投げつけられたのに、なぜか彼女は帰ろうとした俺を引きとめた。

自分で引き留めたくせに、彼女は自分が怖くないのかと俺に尋ねた。俺に怖くないかと尋ねておきながら、怖がっていたのは彼女だった。俺に怯えているわけでなく、あえて言うならば、彼女は彼女に怯えていた。

そして自分以外のすべてに、怯えていた。

だから俺は、守ろうと思った。

紡ぎたい言葉を隠してでも、彼女がずっと笑っていられる世界を作ろうと思った。

あのとき俺は、死なんて怖くないと言ったけれど、今は怖くて仕方がない。

誰にも言わないし、ばらすつもりもないけれど。

イツクを置いて死んでしまふのが、何よりも怖い。

降り出した雪はやむことなく降り続け、天姫殿を白の世界へと染め上げる。

中庭にもたくさん雪が積もっていて、十分に雪だるまが作れるけれど、一緒に作ってもらうことができないので、アタシはそれを諦めた。

竜里の体調は依然良ならず、近頃の彼は布団の中で辞書をめくっている。

辞書なんか見て、面白いのかな？

竜里はアタシよりずっと頭がいいので、もしかしたら面白いのかもしない。

竜里の昼食を受け取って、部屋の方へと戻る。

部屋に近づくと、微かに歌う声が聞こえてくる。いつもと同じ、竜里の大好きな讚美歌。

柔らかい歌声は、耳に心地よく、それを聞いていると幸せな気持ちになる。

「イツク、何してるの。」

部屋の前で立ち止まっていたアタシの意識を、竜里の声が引き戻す。

我に帰ってみれば、アタシはお盆を持ったまま、襖の前で立ち止まっていた。

「何ぼーっとしてんだか。」

そう言つて微笑む竜里の声は優しく、アタシもつられて笑みを作る。

竜里は布団から起き上がり、アタシが持っていたお盆をもつて、すたすたと部屋の中に行つてしまふ。

アタシも慌てて竜里を追つて、部屋に入る。

「竜里っ起きてもいいの？」

「たまには動かないと、体なまっちゃうでしょう？」

ほら、早く自分の分のご飯も持つてきなよ。待つてあげるからさ。

「

優しい竜里の笑顔に見送られて、アタシは自分の分を取りに行くべく部屋を出た。

パタパタと駆け足で出ていくイツクを見送って、俺はお盆を床に置く。

足元には、先ほどまでめくっていた辞書の姿。

「イツク…いつく、しむ…。」

こないだふと思い出して、辞書でひいてみたイツクの名前。

慈しむと一緒に載っていたのは、別の“いつくしむ”で。

思わず、笑みが零れた。

視界に入った瞬間に、これだと思った。

“アイ”という字に慈しむと同じ送り仮名をつけても、それは愛こひしむと読むらしい。

何が、変わったと言うのか。

何かが、変わったと言うのか。

それは全くわからなかったけど、死期が近くなって心が変わったのだと、思うことにしてみた。

「イツク。これ、見て。」

いつものように、俺のあげた聖書を読んでいた彼女を、手招きして呼び寄せる。

今日はずいぶんと調子が良く、彼女の元まで行けなかったというわけでもなく、ただそうしたかっただけ。

布団の中で、体だけ起こした俺の膝の上に置いた辞書を、彼女は覗き込む。

俺の指さす先を見て、彼女は首をかしげる。

「イツクの、名前。」

何を言われたのか、さっぱりわからなかった。

思わずポカンとしたアタシを見て、竜里は小さく笑みをこぼす。何度目を瞬きしても、そこにあるのは“愛”と言つ字で。

「竜里、この字、アイだよ？」

アタシがそう言うと、竜里は笑って、ページをめくる。

“あ”のところから移動して、“い”のところへ。

「いつくしむって、愛情の愛でも、愛しむって読むんだって。」
そう言って竜里が指さした先には、愛しむ、と書かれていて、
思わず、涙が零れた。

イツクの、漆黒の瞳から透明の涙が零れる。
その涙を指で拭くと、イツクの漆黒の瞳が俺に向けられる。
それが無性にいとしくて、無意識のまま、俺はイツクに口付けた。

「ろん…り？」

驚いたんだろう、放心しているイツクがおかしくて、思わず俺は笑いだす。

そんな俺にイツクは我に返ったのか、真っ赤な顔をして怒り出す。

「なっ…なにがおかしいのよっ。」

そんな風にイツクが怒っても、俺の笑いは止まらなくて、声を出して笑ったのなんていつぶりだろうと、頭の隅で考えた。

やっと笑い終わった俺を、イツクが責めるような視線で見る。

確かに彼女が責めたくなるのもわかるのだが、それがまた俺の笑いを誘う。

思わず笑みが零れるほどに、いとおいしいと思う。

「好きだよ。」

初めて紡いだ俺の気持ちに、イツクはもともと大きな漆黒の瞳をさらに大きく見開いた。

それが無性に可愛くて、無性にいとしくて…俺は彼女が呆けている隙に、再びその唇に口づけを落とす。

「そんな、こと、聞いてないっ!」

真っ赤な顔をしてそう言うイツクに、俺はまた笑みを零す。

今日初めて紡いだのだから、彼女が聞いてないと言っるのは当たり前すぎることで。

「もっかい言ってほしいのなら、言ってあげるけど?」

そう言った俺に、イツクは息をのむ。
真っ赤な顔して下を向いてしまったイツクの手を掴んで、その顔を覗き込む。

「イツクは？」

手加減なんて、してあげない。
待ってあげられる時間なんて、俺には残されていないから。

「アタ…シは、」

その先は、紡がれることなく、俺とイツクの体は、宵の闇へと消えていった。

少し無理をさせてしまったのか、気絶したように眠るイツクを見て、俺は小さく微笑んだ。

彼女の胸元には俺の散らした紅い花が散っていて、白い肌とのコントラストが、ひどく綺麗。

さらさらと流れる漆黒の髪に小さく口付け、俺は彼女の頭を撫ぜる。

「愛してる。」

寝ている君に届かなくても、それは俺が紡ぐたった一つの真実。

あれから一月、あの日のことが嘘だったように、竜里は弱り、死んでしまった。

天女のいる遊女屋は、天女を失い、アタシは竜里が最後まで紡ごうとしなかった言葉の意味を知った。

『天姫の妻となった女は、表の天姫殿の責任者とならなければならぬ。』

そう言った雅灯さんの言葉で、アタシはすべてがわかった。

アタシだって気づいていたんだ、竜里がアタシを守ろうとしていてくれたこと。

竜里がアタシを、人の目に晒される位置に立たないでいられるようにしてくれていたこと。

アタシの容姿は、人に蔑まれ、人に嫌われるそれである。

アタシは自分が誰かを傷つけることに怯え、同時に誰かに傷つけられることに怯えていた。

だから竜里は、アタシに樂園をくれた。

優しくて綺麗で、みんなアタシに優しくしてくれる、そんな樂園を。

何も言わなくても、誰と争わなくても竜里は隣をアタシのために用意してくれたから、

アタシはそれに甘えて、その位置を自分の力で手に入れようとしなかったの。

竜里はアタシを守るために、わざと言葉を紡がなかったと言っのに。

そうやって竜里は、アタシを表の天姫殿の責任者にさせないために、たくさんのことに気を配った。

だけどそんな彼にもたった一つだけ、本当にたった一つだけ、ミス
を犯した。

「雅灯さん、天姫殿さえ構わないのなら、アタシは表の天姫殿の責任者になるよ。」

天姫はいなくなってしまうけど、アタシは天姫の妻になる。」

天使のように綺麗で、悪魔のように冷たい、人間らしい優しさを持

ったあの人が残してくれた、たった一つの奇跡の欠片。

竜里が死んだあとに気付いた、体の違和感。

アタシのお腹には、竜里の子供が宿っていた。

産まれた子供は、男の子で、思わず笑ってしまうくらいに、竜里にそっくりだった。

きつとこの子は、天姫殿を継ぐだろう。

薄紫の髪と、濃紺の瞳の子供を抱き上げて、アタシは微笑む。

次代の天姫は、幸せそうにアタシの腕の中で眠っている。

天姫殿は、幾重にも折り重なった、嘘にまみれた幻想の館。
多くの女たちが男たちに金を出させるための嘘を繰り返し、ひどく
美しい女のかんばせは本当のことを言うような顔で、たやすく嘘を
つく。

そんな中でたった一つの真実は、天姫の唱える愛の言葉なのだ、
雅灯は言った。

唯一本当の愛を紡ぐことの許された天姫に、多くの遊女は恋い焦が
れ、その心を欲するのだと言う。

今は天使のような顔で眠るこの子も、いつか誰かに、愛の言葉を紡ぐのだろう。

柔らかな薄紫の髪は、キラキラと輝き、アタシに幸せをくれたあの人のことを思い出す。

天姫殿は、まだまだ続いていく。

嘘にまみれた幻想の館は、小さなこの子にとっては重荷になるのかもしれない。

それでもアタシは、竜里がくれたこの世界を守りたいから、この小さな子に天姫殿から一字を取って、天と名付けた。

「愛、そろそろ仕事だぞ。」

その声にアタシは立ち上がり、天をゆりかごに寝かせ部屋を出た。

天女は一人だけの女のために、手の届くところに降りてくる。

男となった天女は女に愛の言葉を紡ぎ、そして幸せを捧げてく。

天姫が何代と続こうと、女にとっての天姫は一人だけ。

アタシの天姫は、竜里だけ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1691ba/>

七夜の奇跡

2012年1月4日11時52分発行